

■ 研究室から

「幻住庵記」における

「人家よきほどに隔り」考

浪本 澤一

芭蕉（一六四四—一六九四）は、奥羽長途の行脚のあと、元禄二年九月初旬から同四年九月下旬まで、まる二カ年間を近畿圏に滞留した。この期間は、芭蕉の俳諧芸術が最も円熟した時期に当たって、「幻住庵記」「嵯峨日記」が書かれ、湖南・京都の連衆を指導して俳諧撰集『ひさびさ』『猿蓑』の新風が起された。（なお『奥の細道』の草稿が定稿に達するのは元禄七年の初夏である）わたくしは、ここに「幻住庵記」から一つの問題を抽出して、私見を加えたいと思うのであるが、なにぶん紙幅に限りがあるため、肉付をするまでに至らず、わずかに輪郭を描くにとどまるであらう。

芭蕉は、元禄三年四月初めから同年七月の終りごろまで、近江山山の奥にある国分山の幻住庵に滞在した。ここで筆を染めたのが「幻住庵記」で、その山居が、いかに所を得たものであり、また当

時の心境にいかに通ったものであるかを、ことばを尽して語っている。その文章の中で別してわたくしの関心を呼ぶ所は「人家よきほどに隔り」の一節である。この一節はその上文の「山は未申にそぼだち」と呼応して、幻住庵の位置を鮮やかに示している。「山」は国分山であるが、この山は独立峰ではなく、標高二七〇メートルと言われる端山である。その山腹の平地に国分村の鎮守近津尾八幡の社殿があり、その地続きの一角に住み捨てられた草庵があった。それが幻住庵である。「人家」は、山麓の平地に俯瞰される石山村大字国分の村落である。たまたま「山」と「人家」とは「よきほどに隔り」をおいて向かい合っていて、さみし過ぎず、さわがしからず、幽かな懐かしみを感じさせる。山居のかかる雰囲気は芭蕉の好みにびったりと投じたのである。

芭蕉の山居は文人の山居である。このことは禅者の山居と比較することによっていっそう明確になる。中世における五山出身の禅僧に寂室元光（一二九〇—一三六七）がある。寂室は一般にはあまり知られていないが、その人物と詩は心ある識者によって極めて高く評価されている。緇門の栄達を追わず、林下に緇晦の旅をつづけた禅者であって詩を能くした。「竜巖、汕長老、請」と題する詩の承句に「最愛、青山、深、更、深、キ」とあるように、かれは山居を愛し、その詩には山居を詠じたものが多い。

『寂室録』から一詩を挙げる。

緇光 鐘彩 幾春秋

洞庭 誅茅 蓋却 頭

恐は 是し 世人 知 住 処

莫し 教 業 葉 放 随 流

寂室の詩は本来詩偈である。次に、アメリカで白人の間に禪を伝えた千崎如幻による英訳を参考に掲げる。

An ideal Zen student hides himself for many years,
No one knows the brilliancy of his wisdom
No one sees the beautiful colours of his character,
He is like a monk, who lives alone in the mountains,
Such a monk does not allow the stream to carry down
Even a vegetable leaf by which the villagers may discover
him.

——深山の草庵に行を横む禪者は、溪川に葉一葉一枚流すも許されぬ、村里の人に世外の住処を知られようほどに——と語っている。仏道を修する僧を出世間の人というのは世間とのいっさいの縁を無用とする人だからに他ならない。道元（一一〇〇—一二五二）においては「文筆詩歌等其の詮なき事なれば捨つべき道理なり」（正法眼蔵随聞記）と、まことに厳しい。芭蕉は仏頂に参禅したと伝えられるが、それはあくまで文人としての参禅であって、仏者としての本道に立つ禪ではない。芭蕉は俳諧者である。俳諧という鳥は、自然と世間を両翼にしてのみ自由に飛翔することができる。芭蕉の山居は文人のそれであって、仏法を修する禅者の山居とは基本的に理念を異にしている。

「幻住庵記」の「人家よきほどに隔り」の一節は、その場の景観を叙したにとどまらず、常日頃から芭蕉の抱懐する俳諧理念がこの一節に結晶しているのである。なお広く「よきほどに隔り」という

ことばには、一身の処し方、人生への対応の仕方、俳諧芸術の在り方など、芭蕉の人生と芸術を貫く象徴的な意味が内包されている。まずその点を僧形について考えてみよう。芭蕉の旅姿は僧形であったが、かれは僧ではなかった。「幻住庵記」に述懐して、「情一年月の移りこし拙き身の科をおもふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは仏籬祖室の扉に入らむとせしも、たどりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして此一筋につながる。」（傍縁）とあるごとく、仏道に深い関心を寄せながら、本筋としては俳諧の一道を歩んだ生涯であった。その僧形の旅姿に、かれの身の処し方、人生への対処の仕方が顕著に現われている。ほんの一例を挙げる。

腰間に寸鉄を不帯、襟に一囊を懸て、手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵あり、俗に似て髪なし。我僧にあらざといへども、鬘なきものは浮屠の属にたくへて神前に入るをゆるさず。

（野ざらし紀行）

僧にもあらず、俗にもあらず、鳥鼠の間に名をかうぶりの、とりなきしまにもわたりぬべく、門よりふねにのりて、行徳といふところにいたる。（鹿島紀行）

芭蕉は、俗世間と出世間のどちらにも「よきほどに隔り」をおいて、両者の中間に腰を据えている。芭蕉の俳諧理念からすれば、半俗半僧の身の処し方がいちばんびったりしたものであったにちがいない。円頂黒衣の僧形は、一面旅中の安全を計るに便利であったことは否めないが、芭蕉の場合は宗教的内実を具えたものであった。次に、俳諧芸術の在り方に就いて、紙幅の許す限り言及しておく。

去来曰、蕉門の付句は、前句の情を引来るを嫌ふ。唯、前句は

是いかなる場、いかなる人と、其業・其位を能見定め、前句をつきはなしてつくべし。(去来抄)

師のいはく「付くといふ筋は、句・響・飾・移り・推量杯、形なきより起る所なり。心通せざれば及びがたき所也」。

(三冊子)

蕉風の付合は、前句と付句との間に「よきほどに隔り」を置くことによつて、その間に醗醸する気分を尊ぶ。その付筋は前句の余情や余韻を喚ぎ出す付け方で、そこに句・響・移り・位の感合が生じる。「前句をつきはなし」「形なきより起る」とあるはそれである。次に挙げる『となみ山』所収の付合は、前句の場から人情を喚ぎ出した付句である。

野松にせみの鳴き立つる声 浪花

歩行荷持手ぶりの人と嘸して 芭蕉

両句間の感合を能くよく味ってみるがよい。

それからそれへと

——有島武郎——

菊地 弘

ひとりの作家が誕生するまでの過程を探っていると、どうも腑におちないところがあったり、疑問をもったりして、それが気にかかつて前に進まない場合がよくある。とくに作家自身に、作品のモチーフやテーマに関わるものであれば、いらだちとやりきれなさで複雑だ。

小説家有島武郎といえば、『或る女』、『カインの末裔』、『小さき

者へ』などによつて日本近代文学史のうちに積極面を付与したことは誰でも知っている。その有島が明治三十七、八年の頃、芸術というものは生活の余裕が生みだすものという芸術遊戯説を考へていた。ところがすぐそのあと文学に向う決心をして、明治三十九年の四月に『かんかん虫』を書いた。処女小説で、のち『白樺』(明43・10)に発表されたが、有島が下層労働者に心を留めていたことがわかるもので、問題小説である。有島文学の方向を示すものとして注目されることは通説である。芸術の遊戯から芸術へ向う決意をする、そのフアナティズムには興味と関心がそえられる。『私の父と母』の中で、父は薩摩の人、母は南部の人で、『南方の血』の父は感情的で、『北方の血』の母は理性的であった。へ私自身の性格から云へば、固より南方の血を認めない訳には行かないが、割りに北方の血を濃く承けてゐる』という有島自身の語りにも照らしてみるとはなはだ難しいことになる。「南方の血」、「北方の血」のバターにはめて考へる俗説は避けたい。野島秀勝氏は有島のエネルギー発源の一端も「南方の血」、「北方の血」の二元のなかにあつた、というよりは二元による自己把握のなかにあつたと、「人道主義の振幅」のなかで書いている。巧みな表現であるが、「自己把握のなかにあつた」とすると、少々意地悪い言い方だが、思考の様式にやはり一つのパターンがあつたことになる。とするとそのパターンは有島の文学営為にどうかかわってくるのか問いたくなくなるわけである。

有島が札幌農学校を選んだ動機についてはいろいろのことがあげられているが定説はない。有島は自らへ東京に住み続けたら、健康が保たれないと医師から宣告されて、羸弱な自分の肉体をはか